

## ○論文要旨

伝教大師最澄（七六六～七八二）は、『内証仏法相承血脈譜』などによれば、延暦二十三年（八〇四）に入唐し、台州において主たる目的である天台の法門を道邃・行滿より伝授され、さらに台州では国清寺惟象より「大仏頂大契曼荼羅の行事」を、貞元二十一年（八〇五）の帰国の際には、越州龍興寺において順曉より「三部三昧耶」をそれぞれ伝授された。また、以上の受法に加え、草堂寺大素より「五仏頂法」・「冥道無遮齋法」を、明州檀那行者江秘より「如意輪壇」・「普集会壇」を、開元寺靈光より「軍荼利法」をそれぞれ受法したとされる。

日本天台の密教、すなわち台密は、最澄のこれらの受法に始まる。その後、台密は承和五年（八三八）に入唐した慈覚大師円仁（七九四―八六四）、仁寿三年（八五三）に入唐した智証大師円珍（八一四―八九一）によって拡充され、胎藏界と金剛界の両部に蘇悉地を加えた三部の密教として確立される。そして五大院安然（八四一？―九一五？）やそれ以降の諸師らによって台密は大成されていく。

円仁は、不空訳三卷『金剛頂経』の註書『金剛頂大教王経疏』（『金剛頂経疏』）をはじめ、蘇悉地の根本經典である善無畏訳『蘇悉地羯羅経』（『蘇悉地経』）の注釈書『蘇悉地羯羅経略疏』（『蘇悉地経疏』）等を著述している。蘇悉地に関しては、具体的内容・伝承等不明瞭なことが多いが、昨今の研究により『蘇悉地経』の中尊は仏頂尊であると指摘されている。

円珍は『大日経心目』・『大日経指帰』等の『大毘盧遮那成仏神変加持経』（『大日経』）とその注釈に関する書や仏頂尊を主とする不空訳『菩提場所説一字頂輪王経』に対する注疏である『菩提場所説一字頂輪王経略義釈』（『菩提場所説略義釈』）等を著している。

このように、円仁、円珍は仏頂尊に関連するとみられる著作をいくつか遺している。それでは、胎金蘇を特色とする台密の中に仏頂尊を主とする密教は、如何に相關しながら浸透していったのだろうか。

台密の権威である三崎良周博士は『台密の研究』で「仏頂系の密教」と呼称して中国密教と台密とを関連させて蘇悉地乃至三部の密教について探求され克明な分析を行った。さらに、『台密の理論と実践』において、仏頂尊に関する密教を台密における研究課題の一つとして取り上げている。加えて、三崎博士は両書の中で、台密における仏頂尊との関連性を解明するには、最澄周辺の密教に関する事例や記事をさらに収集し調査を重ねる必要があると主張する。なお、仏頂尊と台密との関連を指摘した研究例は三崎博士の研究の他にはあまりなく、最澄の密教について著された論文も多くはない。

筆者は、三崎博士の研究を鑑み、最澄における密教が仏頂尊と如何に結びつくのかに焦点を当て、最澄の撰とされる著や伝記類をはじめ、最澄在世時における最澄周辺の東密の事績や密教に関する記事等を改めて掘り起こし、各先行研究と照らし合わせながら最澄の台密の形成に果たした役割について解明を試みた。

まず第一部では、最澄における密教と仏頂尊との関連性について検証する。

第一章では、最澄が入唐前にどの程度密教乃至仏頂尊について理解を有していたのか考察する。日本には、すでに奈良時代に『大日経』はもとより、多くの密教經典や『仏頂尊勝陀羅尼経』等の陀羅尼經典等が伝来していたとされ、最澄は入唐以前に密教に接し、何

らかの知識が具わっていたと推察される。光定撰『伝述一心戒文』に、最澄が弟子の円澄に、(自身(最澄)が入唐していたにも拘わらず)自身の代わりに桓武天皇の為に五仏頂法の儀式を遂行し、国家を守るように命じている記事がある。この記述が事実であるならば、最澄の入唐前における密教の理解度を示す貴重な資料とこの記事は見做される。そこで、『伝述一心戒文』の記述の真偽に関し、灌頂が(行われたのであるならば、)どのような經典・儀軌に則っていたのか探究した。

第二章では、最澄が、唐において受法した密教の詳細を収めたとされる『内証仏法相承血脈譜』中、「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」と「雜曼荼羅相承師師血脈譜」を重点的に考察する。「胎藏金剛両曼荼羅相承師師血脈譜」は順曉からの受法に係る血脈譜である。この血脈譜と順曉授法の密教であり(後に蘇悉地との関連も指摘される)「三部三昧耶の印信」との関係について言及する。また、仏頂尊に関わる内容が随所に現れる「雜曼荼羅相承師師血脈譜」には、血脈の始まりである「金剛道場大牟尼尊」から仏頂尊を主とする密教經典『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』をそれぞれ翻訳した菩提流志と阿地瞿多が列ねられている。この二人の訳した二經典と、同じく仏頂尊を主尊とする『蘇悉地経』との関連性について論じ、最澄が蘇悉地の要素と繋がる可能性があるのか考証した。

第三章では、帰国後に行った高雄灌頂に関連する可能性がある書『灌頂七日行事鈔』の真偽を検証する。『灌頂七日行事鈔』は、主尊を仏頂尊とする旨が記されており、本書が最澄の真撰であるならば、最澄における密教理解の端緒となりえる。筆者は、『灌頂七日行事鈔』が如何なる書なのか改めて調査し、本書にまつわる問題点を挙げて真偽を論じた。

第四章では、『灌頂七日行事鈔』の著された時期を論点にする。『灌頂七日行事鈔』の名は、その奥書にも記される薬僊撰『天台宗遮那経業破邪弁正記』(『破邪弁正記』)で初めてみつけることができる。そのため、『破邪弁正記』を精査することによって、『灌頂七日行事鈔』の成立と由来について考証した。

第五章では、台密における『陀羅尼集経』の依用について、法曼和尚作とされる『息心抄』を中心に考察を行う。『陀羅尼集経』は『灌頂七日行事鈔』の成立において重要な役割を果たすとされる。この經典は、安然が『八家秘録』や『教時問答』において採り上げることから、その後の台密事相に影響を与えていくが、安然の『陀羅尼集経』における修法に関する記述はみつつかっていない。台密において『陀羅尼集経』に関する何らかの修法を行ったのかどうか、『息心抄』『四天王法』にみえる記述を中心に論究した。

つづいて第二部では、『金剛峰楼閣一切瑜伽瑜祇経』(『瑜祇経』)に説かれる仏頂尊に関する事例に焦点を当てて論じる。安然の著作『教時問答』巻四の四藏(瑜伽瑜祇藏)には、蘇悉地法については、胎藏界と同じように三部立てであり、この法は胎藏大法中の悉地成就法であるという。これに相対して、『瑜祇経』は両部大法の肝心といい、ここに説かれる「大悲胎藏頓証八字印明」は、『大日経』『阿闍梨真実智品』の印明であるが、(金剛界)五部三十七尊法を明かすものであるため、金剛界中の悉地成就法であり、その観点から『瑜祇経』は蘇悉地法と相対すると述べている。四藏の中心となるのは、『瑜祇経』であり、この経は金剛界における蘇悉地法であると解釈し、本経中にも仏頂尊に関連する記述が随所にみられる。そこで、仏頂尊について『瑜祇経』ではどのように説かれているのか、『瑜祇経疏』を述べた安然や台密諸師はどのように解釈したのか調査を行った。

第一章では、『瑜祇経』と仏頂尊について論じられる先行研究を整理・検討し、問題点を

探索した。

第二章では、『瑜祇経』「一切仏頂最上遍照王勝義難摧摧邪一切処瑜伽四行攝法品第六(四攝行品)」に説かれる「壞二乗心」に着目して考察した。「四攝行品」は品題に仏頂尊の名が確認できるが、その理由について未だ研究事例が無い。そこで、「四攝行品」が台密の中で如何に解釈され、扱われているかを中心に論を進める。また、そこから波及したと思われる安然以降の台東密の諸師の関連する章疏類についても考証した。

第三章では、青蓮院吉水蔵『瑜祇経母捺羅』『**𑖀𑖄𑖔𑖔𑖔**私記』『瑜祇経西決』の整理・解析を行った。安然以降、台密における『瑜祇経』に関する書は、聖一国師円爾弁円(一一二〇—一一二八〇)秘書『瑜祇経見聞』一卷、応長二年(一一三二)頃成立と考えられる『瑜祇経口決抜書』八卷(尾欠)、澄豪の講述口決を弟子が書き留めたものとされる『瑜祇経聴聞抄』三卷等が伝わっているが、未だ活字化が進んでいない。台密において『瑜祇経』は、(仏頂尊、仏眼仏母が主として考えられる「金剛吉祥大成就品」に説かれる)「大悲胎蔵頓証八字真言」に関して重要視され、なかでも慈鎮和尚慈円(一一五五—一二二五)のいわゆる仏眼信仰は、密教教学上多くの研究対象になっている。慈円が幼少期に入寺した青蓮院の吉水蔵聖教は、現存する最古の密教聖教とされ、平安時代中期に谷阿闍梨皇慶の時代に成立し、青蓮院初代門跡行玄のときに現在の姿に整えられたとされる。しかしながら、この価値ある吉水蔵所収の『瑜祇経』に関する書物については、未だ内容等の詳細検討はあまり進んでいない。そこで、吉水蔵聖教類収蔵書目の中、「壞二乗心印事」と題した切紙様の書面が内包された『瑜祇経母捺羅』と、それと同時代に書写されたものと考えられる『**𑖀𑖄𑖔𑖔𑖔**私記』『瑜祇経西決』の三本が如何なる書なのかを調査し、三本の翻刻を行ったものを翻刻資料として提示した。